

急速な融雪 引き金

弘前・悪戸 土砂崩れ

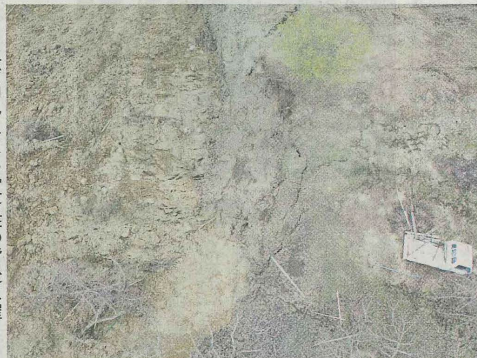
弘大の鄒准教授が現地調査結果

地盤不安定 複数の亀裂 「再び起こる可能性」

弘前市悪戸字後沢で発生した土砂崩れについて、現地を調査した弘前大学農学生命科学部地域環境工学科の鄒准教授は21日、気温上昇による急速な融雪が引き金となり発生した可能性が高いとする暫定的な調査結果を発表した。発生場所の地盤が現在も不安定で現場の背後に複数の亀裂が確認されていることから、「土砂崩れが再び起きる可能性があるため、引き続き注意が必要」と呼び掛けている。



気温上昇と急速な融雪が引き金となって発生したとみられる弘前市悪戸の土砂崩れ現場＝17日（鄒准教授提供）



土砂崩れによる滑落崖の背後に確認された複数の開口亀裂＝17日（鄒准教授提供）

被災農家らへの聞き取りによると、土砂崩れは15日夜から16日午前7時ごろまで続いた。

鄒准教授は17日に現地を調査。ドローンによる写真測量のほか、地質や土砂崩れの痕跡などを確認、地元農家への聞き取りを行った。加えて、気象庁の弘前地域気象観測所（アメダス）のデータを分析、地質図や地形図を照らし合わせた。

その結果、土砂崩れは標高約2200付近の斜面で発生し、崩壊範囲が幅

での間に発生。4軒のリンゴ農家の園地と周辺の農道が崩落したほか、流出した土砂で農業用水路がせき止められるなどの被害が出た。

約60㍎、長さ約230㍎、深さは最大約5㍎に及んだ。崩落した土砂は風化が進んだ泥岩で構成され、水を通しにくい粘土質などが多く含まれていたことが分かった。土砂崩れによって形成された滑落崖の背後には、開口亀裂が複数確認された。

アメダスによると、同市の最高気温は3月下旬から平年値よりも高い日が多く、土砂崩れ発生前には10度を超える日が数日続いた。今冬は記録的な大雪に見舞われ、同市の積雪深が観測史上最大を更新していた。

鄒准教授は「記録的な大雪に加え、3月下旬からの気温上昇で融雪が急速に進んだ。地盤が多くの水を含み、地下水の水圧が急激に上昇した。それにより斜面の安定性が崩れたと考えられる」と説明。開口亀裂や崩れやすくなっている土砂などの現状を踏まえて「現在も地盤の不安定な状態が続いている可能性が高い」と注意を促した。

農家の聞き取りや地形図から過去の地滑り発生を確認。今後は今回の発生メカニズムのほか、周辺の地形や地質などの解析を進めていくとし、「危険箇所の把握につなげていきたい」と力を込めた。

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。